

三、いじめっ子に見られる仲間関係

はじめに

友だちをいじめるということは、明らかに反社会的行為である。しかし、よく考えてみると、これは、一定の人間関係・社会関係の中での、強い積極的な自己主張であり、社会的行動である。

いじめっ子は、嫌われて、一般に孤立する。青年期はともかく、児童期・思春期に自らすんで孤立を求める者はいない。青年後期においても、社会的関係から退いて孤独にふけることはあっても、あえて他と対立したり嫌われることをして、孤立を求めることはない。このようなことから、好んでいじめっ子になる者はいないのであって、いじめっ子はそれなりにいじめ理由があつて自己主張しているのであり、それは一つの社会的行動であるということが理解できる。

このような事情が分かれれば、いじめっ子を指導する糸口もほぐれてくる。本稿では、多種多様にあるいじめっ子の中から、典型的な一つの事例を選んで、いじめっ子の人間関係・社会関係に目を向けてみよう。

いじめられっ子といじめっ子

いじめっ子は、いじめるという行為によってなんらかの心的コンプレックスを解消しようとしている。もし、いじめる相手がいなければ、その心的コンプレックスは他の問題行動として行動化し、いわゆるいじめっ子にはならないかもしれない。このように、いじめっ子はいじめられる子との相互関係の中で生起する。そこで、いじめの格好の対象となりやすく、いじめっ子の出現に手をかす、いわゆる「いじめられっ子」を明らかにすることも、いじめっ子を理解する上で重要である。

いじめられっ子を類型化することは困難であるが、一応、次のように分類することができよう。

① 体力・腕力・運動能力に劣る者 物理的な力が劣る者は、いじめっ子にとって物理的な反撃を受ける心配が少ないので、とかくいじめの対象になりやすい。肢体不自由児や虚弱児などはその典型である。

② 知的発達の遅れている者 知的に遅れている者は、からかわれているという認知さえ遅れることもあって、からかいの対象になりやすい。しかし、腕力にすぐれていると、逆にいじめっ子になる場合も少なくない。

③ 情意的な欠陥のある者 内気で、臆病で、追従的な子どもは、特に粗暴な子どもにつけこまれ、いじめられやすい。自己主張や強い態度をとることができないからである。

④ 社会的に孤立している者 友だちもなく集団から孤立している子どもは、だれも手助けすることはあるまいという安心感から、いじめられやすい。特に、いじめっ子が複数の子によくねらわれる。

⑤ そのほか特別に目立つ者 際立った優等生とか、先生に特別にかわいがられているとか、母子家庭や生活保護家庭の子どもとか、何か特別に目立つ点があると、これもいじめの対象になりやすい。

これらの様々な様相が、いじめっ子たちの様々なコンプレックスを刺激するのである。

以上の類型がいくつか重なるとき、いじめられっ子になる確率は高く、逆に言えば、いじめっ子の出現率も高くなる。要するに、心身および社会的な状況から特別に周囲から浮き立ち、その浮き立った点がいじめっ子の動機を持つ潜在的ないじめっ子に劣等感や優越感や競争心や嫉妬心をかきたてるとき、いじめっ子が出現する。いじめっ子がいじめられっ子のどこに何を感じているのかを知るとは、いじめっ子の理解と指導にとって、極めて重要なこ

とである。

〈事例〉

中学1年男子A。父親は交通事故で死亡し、母親と妹一人の家庭。体格普通。学業普通。嫉妬心、競争心が表面に強く出すぎており、周囲からあまり好感をもたれずに軽蔑さえされて、敬遠されがちである。親しい友人はいない。母親が担任教師にもっと勉強させてほしい、もっと成績が上がるようにしてほしいと訴えるので、担任は事あるごとに激励するが、それをAはかえって先生から嫌われている、目をつけられていると誤解し、担任を煙たく感じ、敵意さえ抱いていた。

二学期の初めに、Aのクラスに男子Hが転校してきた。それまで親しい友人がいない寂しさも手伝って、Aは転校時の不安を隠せないでいるHに接近し、親しくなり、Hを自分の通っている塾にも入れて急速に親しくなる。Aは、学業、体力、性格などで、Hが自分にちょうどふさわしい友だちだと思っていた。ところが、10月末の中間試験の成績を見せ合ったとき、授業中ほとんど発言もせず目立たないHが意外に成績がよいのを知って驚き、Aはそれまでのように素直につきあえない気分を感じた。

その数日後、担任が二人に向かって、「仲良くするのはよいけれど、まじめに励まし合って勉強しなければダメだよ」と言ったとき、Aは自分に向けられる担任の視線や態度から担任がHに対して暗に「Aはあまりまじめではないから注意しろよ」と言ったように感じ、

急にHに対して、怒りや敵意や嫉妬のまじりあった複雑な感情を味わった。そこでAは、Hともっと親しくしていたいし、Hの気持ちも確かめてみたい不安にかられて、吸ってみたこともないタバコを家から持ち出し、Hを塾の屋上に連れ出して、一緒に吸うことをすめた。Hはあまり気かすすまなかったが、友だちを失うのが恐かったので、Aの言うなりに、煙にむせりながらそれに従った。

以後、二人の関係は、Aが主導権を握るようになった。Aにしてみると、生まれて初めて友人関係で主導者になった。AのHに対する態度はエスカレートし、タバコを吸わせ、金を貸り、結局はたかるようなことも始まった。HにとってAは次第に嫌悪と恐怖を感じさせる存在に変わっていったが、ほかに友だちもできなかったのも、二人の関係はずるずると続いた。その間にAは、Hに対するときだけでなく、クラスの仲間に対しても、概して乱暴な言動をとるように変化していった。

このようにAは、その特性、学級集団の中での位置、担任の態度、担任との関係、いじめられっ子の出現等によって、ごく自然に、いじめっ子として変貌するに至った。特にいじめられっ子Hの出現が、Aにとっていじめっ子化の直接的引き金となっている。

⑦ いじめっ子からいじめられっ子へ

AとHの関係は、Hが塾を休みがちになり、学校へも行きたくないと訴えるようになって家庭の知るところとなり、担任に相談がもちこまれた。そのころでは、クラスのほとんど全

員が、AとHの関係を知っており、また、Hとの問題を離れても、その粗暴で非協調的な言動からAはクラス全体から排斥されるようになっていた。

担任は、Hが欠席した日のホームルームの時間に、一般的な話として、最近学内で行われている弱い者いじめについてという形で話題を提供し、暗黙のうちにAを戒めようとした。ところが、ある生徒が「それはAのことではないか」と言い出したため、Hのいない気安さや、ちょうど学期末試験の始まる直前でみんながいらだっていたせいもあるのか、後は収拾がつかなくらい批難がAに集中した。Aは顔を真っ赤にして下を向いたまま唇をかみしめていた。Aは頭の中ではそれほどHをいじめたという実感を持っていなかったが、Aには反論するほどの勇氣や抗弁の自信がなかった。それがまた、級友たちのつけ目でもあった。Aはひたすら屈辱感に耐えていた。

担任は、クラス全体が事情をよく知っていて、これほどまでにAに敵意や嫌悪感を持っているとは予想もしていなかった。軽はずみな問題提起をしたと思ったが、Aへの攻撃をやめさせるのに精いっぱい、Aをかばうという態度に欠けていた。

これ以後、何人かの級友が見守るようにHの学校行き帰りを共にするようになり、それとともに、Aへの攻撃は、まるで公認されたかのように、公然と始められた。「いじめっ子!」「勉強もできないくせに」「父なし子」と面と向かって言う子も出てきた。Aも時々、力の弱そうな子を選んでけんかを売ろうとしたが、かえって小集団を組んで反撃され、つけない

余地もなく、Hとの接触も完全に絶たれて、クラスの中に身を置くところがなくなっていた。一転して、Aはクラス全体から排斥される「いじめられっ子」になってしまったのである。

本例では、いじめっ子がクラス全体から排斥されていじめられっ子になり、次に述べるように再びまた、今度は本格的ないじめっ子として登場してくるのであるが、このように、初めはいじめっ子でもないのに集団から孤立し、反動としていじめっ子に転じていく例は少なくない。

① いじめられっ子からまたいじめっ子へ

Aは、自分が級友たちから疎外されるのは担任が自分を嫌っていることも関係していると考え、自分をかばってくれない担任に八つ当たりの恨みを持った。こうなると、Aには学校は全くおもしろくなく、下校後はゲームセンターに出入りするようになって、学業成績は急下降していった。

このようなAを、学内の非行グループが放っておくはずもなく、やがてAの方からも近づいて、Aは学内番長グループの下級構成メンバーになっていった。2年生の終わりころには、Aはおきまりのようなコースをたどって、上級生たちとシンナー吸引、オートバイの無免許運転を重ねるようになった。しかし担任は、Aがその後もクラス全体から排斥され、学内インフォーマルグループの中に身を置いたことに気づかなかった。

2年生になって、Aは3年生の命令を受けてカンパやパーティー券売りをするようになった。Aは初め、そのようなことはできないと思いい、小遣錢でそれをまかっていた。しかし、いつまでもそれで通すこともできず、ついに、めばしい相手を探してそれを実行するようになった。やってみると、予想外にうまくいくものだった。

Aは、番長グループと一緒にいることが暗黙のうちに自分の威勢となっていることに気づいた。また、1年生のときとは異なり、一般の生徒たちがいたわり助け合って連帯することが少なくなり、むしろ互いに競争し反目し合っていることが多いのを敏感に察知した。Aは1年のときに自分を攻撃した者を一人ひとり復讐していった。校舎の物陰に連れて行って殴っても、道端で会って金をせびっても、以前のように反発されず、後から集団でこらしめを受けることもなかった。

こうしてAは、校内暴力集団にのめりこんで、その先棒となった。職員室でもようやくAを問題児として注目するようになったが、このときには、Aは授業中に他の落ちこぼれ生徒の先になって騒ぎ、公然と教師に反抗的態度を示すようになっていた。Aは、番長グループに毅然とした態度をとれない教師集団と、点取り競争をして信頼し合っていない生徒集団をなめてしまい、自分の所属する集団には信頼と連帯があると思いい込んでいた。2年時も3学期に入ると、他クラスのB、C、D、Eも同じグループに入ってきた。みんな、クラス内で

孤立しているか、学業上の落ちこぼれのどちらかで、彼らは固い連帯意識のもとに結ばれ、単独あるいは集団で粗暴な行為をもって周囲を威圧した。

最近のいじめっ子は、バックに衆を頼んだり、あるいは虎の威を借りている場合が少なくない。このような子に対しては、いじめられる子を支持する連帯が何よりも必要である。残念なことに、子どもらしい正義と信頼に基づく連帯は、中学１年生どまりで、高校進学への意識が芽生え、高まる中学２年生からはそれが急速に失われていく。遺憾ながら、現代の中学校の教育・管理体制は、子どもたちから信頼と連帯を奪い、思春期暴力を培う体質的基盤を持っているのではないだろうか。

おわりに

いじめっ子が誕生してくるプロセスを、その人間関係・社会関係に焦点をあてて見てきた。ここで明らかになったものを柱にしつつ、いじめっ子の仲間関係をまとめてみたい。

① いじめられっ子との関係

いじめっ子はいじめられっ子なしには生まれえない。このいじめられっ子は、時にはいじめっ子の仲間である。逆説的に言うと、いじめられっ子がいなければ、いじめっ子は生まれえないということになる。いじめられっ子をつくらない指導もまた、第一義的に重要なことである。

② いじめっ子もいじめられっ子であるということ

いじめっ子も実はいじめられっ子の要素をたくさん持っており、いじめられる反動としていじめっ子になる場合も少なくない。母子家庭・父子家庭、学業不振、嫉妬深い性格、教師への不信、弱い者いじめ等々、いじめっ子・いじめられっ子をつくる関係要因もすべて本人だけの責任ではなく、かなりの部分、周囲の事情によってつくられている。“いじめる”という能動的な面に冷たく注目するだけでなく、“いじめられている”あるいは“いじめざるを得ない”という受動的な面にも温かい目を向け、それを理解し、受容することが肝要である。

③ いじめっ子同士の連帯意識

すでに明らかのように、いじめっ子は好んでいじめっ子になっているわけではない。そこまで追いやることになった孤立感、被害感、絶望感がある。これらに耐え、打ち勝つために同じ痛みを持った者同士が求め合って固く結束する。この結末は、アブノーマルで一時的ではあるが、これをもとに、さらにこれを固めるために、非行的動機を積み重ね、“いじめ”はやがて彼らの非行の一形態にすぎなくなる。いじめっ子の集団ができたとき、彼らの幻想的な信頼と連帯に打ち勝つ真の人間関係を回復してやることは、急速な非行化への傾斜を防ぐためにも、緊要の課題である。

（『教育心理』29・2 一九六一年）